

# ぼくはどうせオオカミの子

赤木由子・文 山口みねやす・絵



あか き よし こ  
赤木由子

ぼくはどうせオオカミの子

小峰書店 1982(昭57)年

135p.22cm (こみね創作童話・28)

ぼくはどうせオオカミの子

1982年2月5日 第1刷発行

1982年9月5日 第3刷発行

著者 あか き よし こ  
赤木由子

発行者 小峰広恵

発行所 株式会社 小峰書店

〒160 東京都新宿区舟町6

☎東京 357-3521(代表)

振替 東京 6-195544

本文印刷 株式会社 厚德社

表紙印刷 合資会社 斎藤印刷所

製本 小高製本工業株式会社

# ぼくはどうせオオカミの子

あかぎよしこ

赤木由子・文

やまぐち

山口みねやす・絵



はじめに

きんやのあだ名はオオカミの子。  
うそをつくたびに、クラス  
のみんなから、机といすをとりあげられてしま  
う。

「ともだちなんて、いらないね。ひとりで生  
きるさ。」

と、いつてみたけれど、きんやは、みゆきが  
持っている子犬のロミがほしい。

たまおが、いつてくれた。



「きんやくんは、ほんとうは、どうぶつをかわいがる、いい子だよ。」

ロミは、きんやのものになった。そのときから、みゆきのおせっかいがはじまった。

「うそをついたらロミをかえすのよ。きんやくん、いい子になりましたよね。」

きんやの、くろうは、つきない。





はじめに 2

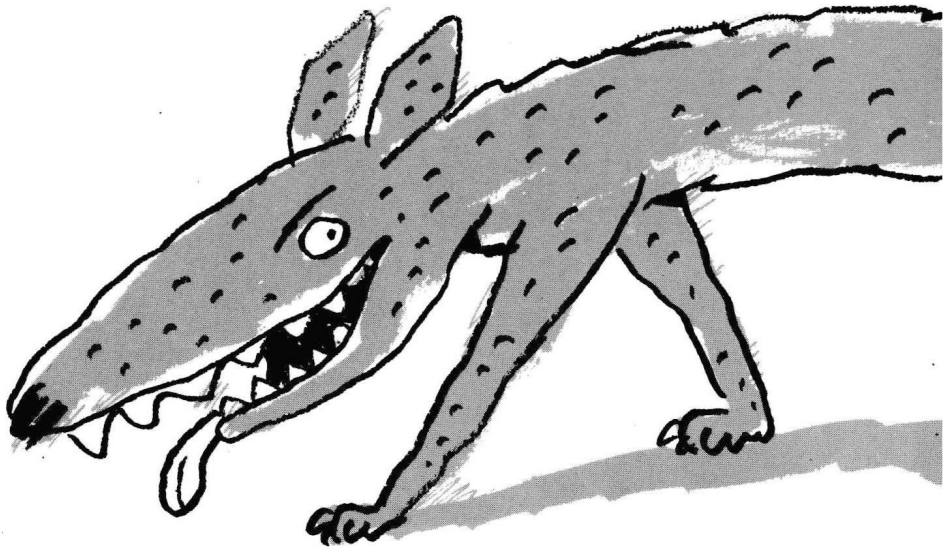


ブタが空をとぶ 8

教科書は、なぜ、かわかない 28

オオカミ少年 52

台風の日 68



あ  
と  
が  
き

134

ロ  
ミ  
を  
た  
す  
け  
ろ

118

え  
り  
子  
コ  
オ  
ロ  
ギ

102

よ  
わ  
い  
犬  
ほ  
ど  
よ  
く  
ほ  
え  
る

84

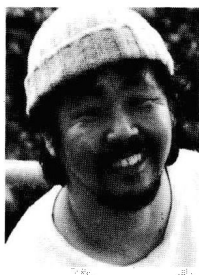
\* 文をかった人



**赤木由子** 一九二七年山形県に生まれる。日本児童文学者協会、日本子ども本研究学会員。主な著書に『草の根こぞう千吉』（野間児童文芸賞推奨作品賞）『二つの国の物語』『あの雲の下で』『ぼくらゆきんこ』『鬼がクスクスわらってる』『大ちゃんの門出』『逃げていったあの子』などがある。

現住所 東京都三鷹市下連雀六一―五二一

\* 絵をかった人



**山口みねやす** 一九四三年東京に生まれる。児童出版美術家連盟所属。主な作品に『まほうのけんきゅうじょ』『ゆめくうぞう』『原猫のブルース』『四人のヤッコと半分のアッコ』『アナシンと五』『YAM YAM』『ゆめのけんきゅうじょ』『わたしってだれ』などがある。

現住所 東京都国立市谷保四四九一五



# ぼくはどうせオオカミの子



## ブタが空をとぶ

ランドセルをかたかたいわせて、二階の三年三組の教室にはいったきんやは、「おい、ブタが空をとんだぞ。」

と、大声でいった。

教室のうしろですもうをとっていた、しげるとむねのりが、

「おまえのうそにだまされるか。」

といって、きんやのそばへきた。

顔もからだつきも角ばって、小型こがたロボットというあだ名をつけられている、しげるが、

「うそばかりついていると、いまにどろぼうになるんだぞ。」  
といった。

のつぽで、男子の学級委員をしているむねのりは、きんやがもうどろぼうをやってしまったかのように、いやな目つきをして、いった。

「そう。どろぼうは、けいさつのおじさんにつかまって、ガッチャンと手じょう、かけられるな。」

きんやが、わめいた。

「ほんとうに鉄のブタが空をとんだんだもの、しょうがないだろう。新聞に、でかでか、のってんだからな。」

三人がいいあいをしているあいだ、杉田<sup>すぎた</sup>たまおがまどぎわに走っていつて、空のあちこちをながめはじめた。

それを見た、女子の学級委員で女王さまといわれる、みゆきが、

「たまおくん、だまされちゃだめよ。」

といって、きんやの前に来た。

「あんた、ほんとうに鉄のブタが空をとんだというなら、しょうこを見せなさいよ。」

「あ、いいですよ。おれ、うそなんかついてないんだからね。」

きんやは、ビー玉やじしゃくや、いろんなものはいっている上着のポケットから、くしゃくしゃの新聞のきれはしをだした。

「はやく、よこしなさいよ。」

みゆきが、ぱつとひったくった。そのひょうしに、みゆきの手のつめが、きんやの手の甲こをかすった。

「いてえな。おまえ、わざとつめのさき、とがらしてるんだらう。」

きんやがいつでも、みゆきは新聞に目をおすのに、いそがしい。きんやは



からだの大きいみゆきを見あげて、ぶつぶつもんくをいった。

「おまえに、女王さまなんてあだ名、もったいないね。女王バチでたくさんだよ。」

今日のみゆきは、黒と黄色のよこじまのワンピースを着ているので、ほんとうに、ハチそっくりだった。

「女王バチだつてさ。」

しげるたちがくすくすわらったが、それいじょうわらうと、みゆきのふとい足でけられるので、あとは口をつぐんだ。

女の子たちが、みゆきのまわりにあつまった。

「ね、ね、なんて書いてあるのよ。」

まゆをよせて新聞を見ていたみゆきが、

「ばかにしてるわ。わたし、読んであげるね。」

といって、読みあげていった。

「八トンの鉄ブタ、八十メートルふつとぶ。だつてき。えーと、なんとかいうゴム工場で、なんとかというかまが、とつぜんドツカーンという音といっしょに、八十メートルふつとんで……。」

「そらみる、おれがいつ、うそついたよう。いつ、どろぼうしたよう。」

ちびでやせっぽちのきんやは、しげるたちのむねをつぎつぎにこづいていった。

「そんなこといったって、いつだつてうそついてんじゃないかよう。」

もうすこしでとくみあいになろうとしたとき、子どもたちのうしろから、

「あつ、はつ、はつ、はー。鉄のブタさんじゃなくて、蒸気じょうきがまのふたがとんだのね。あつ、はつ、はつ、はー。」

と、まのびしたわらい声があった。



きんやたちのたんにんの岡本おかもとまり子先生だ。名前はかわいい女の子みたいだが、きんやのお母さんよりずっと年をとっているの、子どもたちは、かげで、「ばあちゃん先生」とよんでいた。

そのばあちゃん先生が、目をほそくして、「あつ、はつ、はつ、はー」とやると、きんやたちは、なんとなくひょうしぬけしてしまふのだった。

岡本おかもと先生は、





「ほら、ほら、みんな、おもてで遊ぶのよ。」

といって、ニワトリを追いはらうみたい、両うでを大きく広げて、子どもたちを教室の外へ追いだした。

おとなしいえり子と手をつないだみゆきが、鼻をならした。

「先生も、いっしょに遊んでくれないや、つまらないよ。」

「あら、まあ。みゆきちゃん、あまえんぼだね。それじゃ、お